

「させていただく」における日本人と学習者の 認識の相違について

—ヨーロッパ圏の学習者を中心として—

李 讓 珍*

(e-mail : gemma001224@gmail.com)

<目 次>

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. はじめに | 3. 調査結果 |
| 2. 研究概要 | 3.1. 「させていただく」の使用に関する調査結果 |
| 2.1. 研究対象 | 3.2. 「させていただく」の使用基準に関する調査結果 |
| 2.2. 調査内容 | 3.3. 日本人と学習者の「させていただく」文における
選択傾向 |
| 2.2.1. アンケートに用いられる「させていただく」
文の性質 | 3.3.1. 「違和感」を中心とした調査結果の分析 |
| 2.2.2. 調査項目と質問文 | 3.3.2. 相違の原因として考えられるもの |
| | 4. おわりに |

キーワード：させていただく(Saseteitadaku), 拡大用法(Expansion usage), 謙讓語(Humble language), 敬語(Attitudinal expression), アンケート調査(Questionnaire survey)

1. はじめに

野田(2012:1)は、外国人日本語学習者（以下、学習者とする）が日本語を「聞く」「読む」という行為を行う上で、それらを理解するために必要なのは、文法知識より語句や語彙の意味を知ることであると述べている。また、「話す」「書く」という行為も「聞く」「読む」ときと同様であるとし、その一例として「説明させていただきます」を挙げている。野田(2012:10)は、「説明させていただく」について、学習者は「説明する」より丁寧な表現として相手が明らかに目上のときに使うことを知っていれば済む問題であり、この表現の

* 嶺南大学校、非常勤講師、日本語学・日本語教育学

文法的な成り立ちなどは特に必要ないとし、教育現場でこれを語彙として扱えるものであると述べている。しかし、小池(2000:59)では、著者自身の経験談として「先生、帰らせていただけませんか」という例を挙げながら、「本人は大変丁寧に話しているつもりである。だが、文型としては丁寧であったとしても、この文脈で使用すると、丁寧でないばかりか相手の気分を害してしまうことさえあり得る」と述べている。

以上のことを考えると「させていただく」という表現は場合によっては、聞き手である日本人母語話者（以下、日本人）に対しても、学習者の意図とは反対に誤解を与える恐れのある表現であるともいえる。しかし、このようなことは学習者自らが理解・認識するのはそう簡単なものではないと思われる。したがって、「させていただく」を野田(2012)の述べるとおりに単に丁寧な言い方として「語彙扱い」をしてしまうと、学習者の不完全な理解により「させていただく」の運用において問題が生じやすくなる。

このように、これまでの教育現場では「させていただく」という表現は付けておくと丁寧な言い方になるという説明のみを行ってきたため、外国人日本語学習者にとってはその使い方において非常に混乱を感じやすい文法項目の一つであると考えられる。また、日本人の間でもその使い方において、どこまでを自然な表現として認めるべきかということと言及されることの多いこの表現¹⁾を、学習者に安易に語彙として教える場合、学習者と日本人との円滑なコミュニケーションを阻害してしまう可能性があるものとして思われる。

そこで、李(2016)では、これらのことを検証するため、日本人と東アジアの学習者（韓国人と中国人）を対象とし、「させていただく」の使用に関する比較調査を行った。その結果、学習者はN1級以上のレベルであったにもかかわらず、日本人と比較したときに、特に、「違和感」と「自己主張性」として使われている「させていただく」例文の選択において日本人とは異なる傾向が見られた。

しかし、このような学習者の選択傾向は東アジアの学習者のみに見られるものなのかをより詳しく分析する必要があると考えられたため、本研究では、李(2016)を参考にし、他の文化圏の学習者も調査対象として加え比較分析を行う。

2. 研究概要

1) 「させていただく」に関する研究は菊地(1994・1997)をはじめ、井口(1995)・李(1998)・米沢(2001)・伊藤(2011)・塩田(2016)・李(2017)など多々ある。

2.1. 研究対象

本研究では、李(2016)の調査と同様の形式でヨーロッパ圏（以下、ヨーロッパ）の学習者を対象にアンケート調査を行う。そして、この調査から得られた結果を李(2016)の調査結果と比較分析を行う。このような調査を通して謙讓表現である「させていただく」に対する諸文化圏の学習者の使用実体や認識について把握することができるようになるだろう。

本稿での調査の対象は前述のとおりヨーロッパの学習者であり、その詳細については以下の<表1>にまとめて示す。

<表1> 調査対象者数

		東アジアの学習者			ヨーロッパの学習者				
国籍	日本	韓国	中国	計	イギリス	オーストリア	ドイツ	フランス	計
人数	100	36	17	53	7	7	3	3	20

李(2016)の調査では、調査対象である東アジアの学習者数が53名であるのに対して、本研究での調査対象であるヨーロッパの学習者は20名程度である。調査当時、高度の日本語能力を有するヨーロッパの学習者を確保するのが非常に困難であったが、これを換言すると、ヨーロッパの学習者は東アジアの学習者より高級レベルの日本語能力を有する学習者が少ないとでもいえよう²⁾。

また、柏野(2007:391)は、外来語の使用度数の調査において、使用数が非常に少ないものもあるが、少なくともその結果から増減傾向をとらえることが可能であれば語の使用状況を把握するには意味があると指摘している。本研究でも研究対象や方法は異なるものの、柏野(2007)の観点を取り入れ、ヨーロッパの学習者の調査結果からある傾向や特徴が見られるものがあるのであれば、それを有意味なものとして扱う。

次は、調査対象の選定基準について述べる。李(2016)は、調査対象を選ぶ際は伊藤(2011)を参考にし、日本人は、都内の大学と大学院³⁾に在学中の18歳～26歳の人で、アルバイトを除き、会社などで働いたことのない100名を対象としアンケート調査を行った。また、東アジアの学習者は、20歳～30歳の日本で1年以上滞在している人（大学・大学

2) 2019年に文部科学省が調査した留学生数をみると、中国が1位(累計114,950人)、韓国が4位(累計17,012人)であるのに対し、ヨーロッパ学習者は10位内に含まれておらず、その他(累計32,673人)となっていることが確認できる。このことから、ヨーロッパの学習者は東アジアの学習者よりその数が非常に少ないということが分かる。 https://www.mext.go.jp/a_menu/a001.htm (検索日: 2020.09.22.)

3) 青山学院大学・慶応義塾大学・実践女子大学・首都大学東京(現東京都立大学)・明治学院大学・東京大学・東京外国語大学・立教大学。

院生・研究生)で、日本語のレベルはN1級以上の人に限定⁴⁾した。今回の調査でもヨーロッパの学習者を選ぶ際に、李(2016)の東アジアの学習者と同様の条件の学習者を選定し調査を行う。

2.2. 調査内容

2.2.1. アンケート調査に用いられる「させていただく」文の性質

上述のとおり、これまでの「させていただく」の研究は表現の自然さについて議論されることが多く、なぜ不自然であると思わせる表現が頻用されるようになったのかについて述べたものが多々ある。したがって、本稿では、「拡大用法」としての「させていただく」文を中心に調査を行う。なお、本研究で用いる「させていただく」の「本来の用法」と「拡大用法」は、菊地(1997)の四分類を用いて以下のように定義する。

[本来の用法]

(I) (本当に)“恩恵／許しをいただく”という場合(「もっとも基本的な使い方」)

[拡大用法]

(II) “恩恵／許しを得てそうする”と捉えられる場合(「拡張」)

(III) “恩恵／許しを得てそうする”と(辛うじて)見立てることができる場合

(IV) “恩恵／許しを得てそうする”とは全く捉えられない場合

菊地(1997)の四分類を見ると、(I)以外に(II)～(IV)は、「恩恵」や「許し」を与える行動の許可者を想定することがそう簡単でない。そのため、本稿では、(I)を「本来の用法」とし、(II)～(IV)を合わせて「させていただく」の「拡大用法」と呼ぶことにする。

2.2.2. 調査項目と質問文

本稿における調査内容は、李(2016:247-248)の調査形式と同様のものである。本調査で用いた調査項目と用いた質問文⁵⁾を以下の<表2>と<表3>に示す。

4) 「させていただく」が文法として最初に提示されるのはN3級(旧JLPT3～4旧に相当)であるが、李(2016)は、予備調査の結果から日本語がある程度上級レベルに達していないとこの表現を運用するのが難しいと判断したため、N1級以上の学習者をその対象としたという。

5) 質問文の用例の出典については李(2016)のp.248-249を参照されたい。

<表2> 調査項目

質問 1	違和感を感じる文 (重複選択可)
質問 2	攻撃性を感じる文 (重複選択可)
質問 3	敬意を表していると感じる文 (重複選択可)
質問 4	決まりきった言い方だと感じる文 (重複選択可)
質問 5	自己主張性が強いと感じる文 (重複選択可)

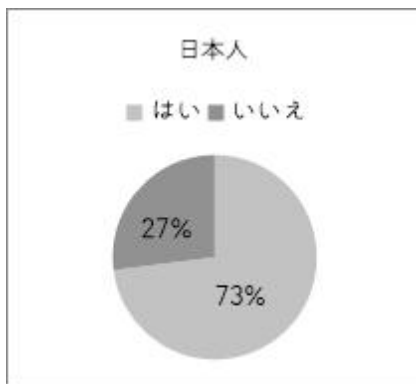
<表3> 調査の質問文

質問文	
1	(先生と学生が研究について話しています。先生が学生に意見を求めたときに、それに対して学生が) はい、言わせていただきますと、私はすごくいい方法だと思います。
2	(会社で会議中、相手の意見に反論したいとき) 一言、言わせていただきますと、私は、～のようにした方がいいと思いますが…。
3	(会社で部下が上司に) では、その企画は予定通りに進めさせていただきます。
4	(営業マンがお客様に商品を勧誘しているときに) 契約条件についてお話を進めさせていただきます。
5	(会議が雑談になって進行していないときに司会者が) すみませんが、進めさせていただきますんですけど…。
6	(ライバルの会社の人に) 今回は、何があっても必ず業界1位を獲得させていただきます。
7	(会社の先輩に向かって) 今回はゲットさせていただきます。
8	(会社の社長に自分の決意を言いながら) 精一杯頑張らせていただきます。
9	(目下の人が目上の人に) では、私はお先に帰らせていただきます。
10	(講義の講演者に対して) 今日は、本当に感動させていただきました。
11	(会社で会議中、相手の意見に反論したいとき) ちょっと、言わせていただきますと、私は、～のようにした方がいいと思いますが…。
12	発表させていただきます。
13	(申し込んだ人と振り込んだ人の名前が違っていても、実は同一人物だというお客様のメールに対し返信のメールで) では、そのようにご理解させていただきます。
14	(大勢の人の前で自己紹介をするとき) 私は、2012年に〇〇高校を卒業させていただきました。
15	(裁判所に) 訴えさせていただきます。
16	(店頭の張り紙で) 本日は、休ませていただきます。
17	(テレビ番組でリポーターが) すごくいい旅で、リフレッシュできて、すっかり元気にならせていただきました。
18	(近所の人に) 私どもは、正月はハワイで過ごさせていただきます。

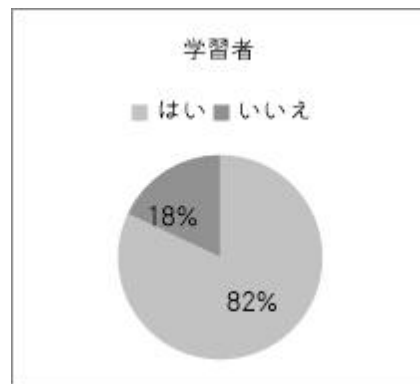
3. 調査結果

3.1. 「させていただく」の使用に関する調査結果

本研究では、前節で挙げた用例調査に先立ち、「させていただく」の使用に関する認識調査を行った。まずは、「させていただく」を自分の生活の中で「よく耳にするか」、また、「よく使うか」ということについて尋ねてみた。その結果を以下の<図1-1>と<図1-2>に示す。



<図1-1> 「よく耳にするか」

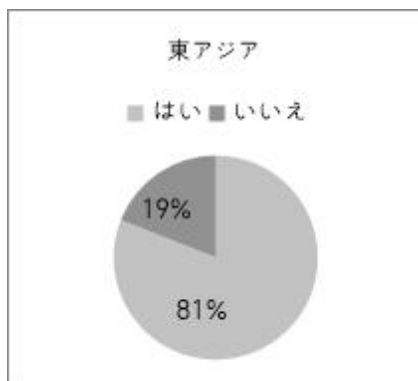


<図1-2> 「よく耳にするか」

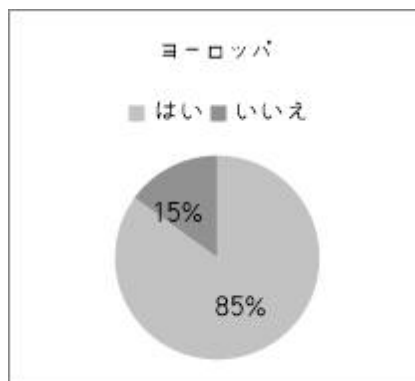
<図1-1>と<図1-2>を見ると、「させていただく」を「よく耳にするか」という質問に対し、日本人の73%と学習者の82%が「はい」と答えている。このことから、日本人も学習者も自分の生活の中で「させていただく」という表現を接する機会が多いということが分かる。また、このようなことから今の日本の社会では「させていただく」が頻繁に用いられているということも推測できる。

上掲の<図1-2>は東アジアとヨーロッパの学習者の結果を合わせて表したものであるが、東アジアとヨーロッパの学習者の結果を比較するために、以下のように学習者の結果を分けて<図2-1>と<図2-2>に示す。これらの図を見ると、東アジアは「よく耳にすると答えた人が81%であり、ヨーロッパは85%である。

以上、見てきたことを整理すると、「ヨーロッパ>東アジア>日本人」の順に「させていただく」をよく耳にするということが出来るが、これについては、次の質問の分析と関連づけて述べることにする。

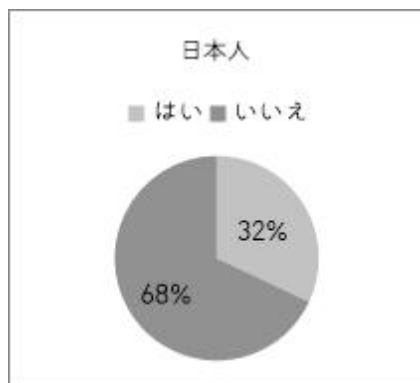


<図2-1> 「よく耳にするか」

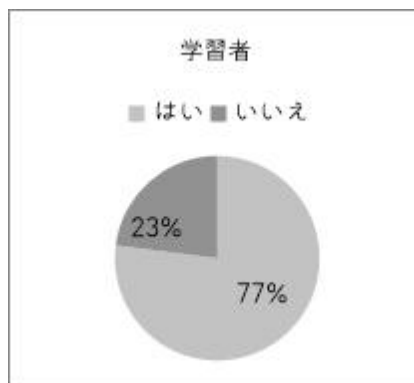


<図2-2> 「よく耳にするか」

次は、実生活で「させていただく」を「よく使用するか」という質問をした。その結果を以下の<図3-1>と<図3-2>に表す。



<図3-1> 「よく使用するか」



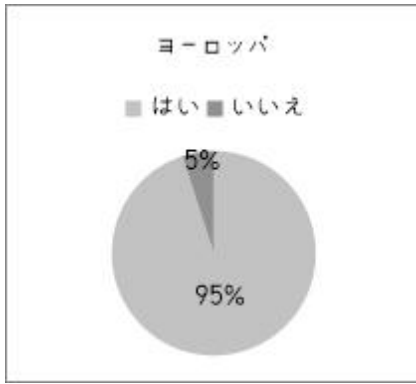
<図3-2> 「よく使用するか」

<図3-1>と<図3-2>に拠ると、日本人はよく使うと答えた人が32%であるのに対し、学習者は77%であり、両者の間に約2倍以上の差があることが確認できる。このような日本人の結果について李(2016:250)は、調査対象者がまだ大学生という身分であるから「させていただく」をよく使う機会がなかったのではないかと述べている。また、「させていただく」は政治家や商業現場での使用が多く観察される表現であるため⁶⁾、調査の対象となった日本人はこの表現を自分の生活の中で接する機会は多かった反面、使用する機会はそれほ

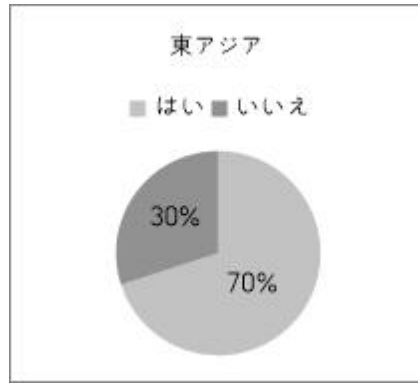
6) 李(1998)・菊地(1994)・伊藤(2011)・李(2017)など

どなかったとも推定される。これは、大学生という身分では「させていただく」が使用できる場面は限定されているとも言えよう。

一方、学習者は77%もよく使うと答えたが、これは、上述したとおり、自分の日本の生活の中でこの表現に接する機会が多いため、「させていただく」をなじみのある表現として認識し、自然と実生活でよく用いるようになったのではないかと思われる。



<図4-1> 「よく使用するか」



<図4-1> 「よく使用するか」

<図3-2>に拠ると、東アジアとヨーロッパの学習者を合わせてよく使うと答えた人が77%であったが、<図4-1>と<図4-2>を見ると、東アジアが70%であるのに対し、ヨーロッパの学習者は95%の人がよく使うと答えている。これは、「よく耳にするか」という質問の結果とも関連があると思われるが、ヨーロッパの学習者は日本の生活の中で「させていただく」をよく耳にしているという認識が強いため、そのような認識が実際の使用にまで影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

3.2. 「させていただく」の使用基準に関する調査結果

次は、「させていただく」の使用基準となるものについて訪ねた。その結果を<表4>にまとめる。

<表4> 日本人と学習者の「させていただく」の使用基準

使おうとしたらどんなときに使うか (重複選択可)	選択した人の百分率 (%)		
	日本人	東アジア	ヨーロッパ

相手に敬意をもっているとき	84	74	88
適切な敬語が見つからないとき	27	17	60
自分の立場をよくしたいとき	4	13	25
相手に対して自分の品位を高くしたいとき	7	13	10
相手と距離をおきたいとき	10	9	10
相手に気兼ねするとき	23	15	55
相手に自分の意見を言いたいとき	13	9	35
その他	7	13	0

〈表4〉によると、日本人と学習者が「させていただく」を「相手に敬意をもっているとき」に使うと答えた人が一番多い。また、学習者の結果を詳しくみると、東アジアの学習者の「させていただく」の使用基準は日本人とそれほど相違はない。しかし、ヨーロッパの学習者の使用基準をみると、「相手に敬意をもっているとき」以外に、「適切な敬語が見つからないとき」と「相手に気兼ねするとき」の比率が高いのが目立つ。

以上のことから、東アジアの学習者は「させていただく」を「相手に敬意を示す」表現として自分の生活でよく使用することができる。また、ヨーロッパの学習者は〈表3〉で確認したとおり、「させていただく」を「相手に敬意をもっているとき」以外に、「適切な敬語が見つからないとき」や「相手に気兼ねするとき」にも使用する表現であると認識している人が多いため、この表現を「よく使う」と答えた人が95%もいたのではないかと思われる。

3.3. 日本人と学習者の「させていただく」文における選択傾向

ここでは、前章で挙げた「させていただく」が用いられた例文（全18文）に対する日本人と学習者の選択結果について述べる。上記のとおり、質問項目は全て五つであり、それぞれの選択を百分率で以下の〈表5〉にまとめて示す⁷⁾。

〈表5〉 各例文に対する選択率

例文	違和感			攻撃性			自己主張性			敬意			決まり切った言い方		
	日	東	ヨ	日	東	ヨ	日	東	ヨ	日	東	ヨ	日	東	ヨ

7) 例文2とは異なる結果が出ることを期待し例文11に副詞である「ちょっと」を入れてみたが、例文2と結果を比較した際にそれほど相違がなかったため、〈表5〉では例文11の結果を排除した。

1	85	32	0	33	19	0	54	15	0	35	72	90	8	21	20
2	22	5	5	67	33	5	76	72	75	19	21	70	29	26	15
3	17	19	25	6	9	25	15	28	20	56	51	30	47	55	65
4	11	8	25	5	4	25	19	11	15	63	64	55	59	55	25
5	44	17	0	43	18	0	40	50	0	22	19	45	9	19	0
6	43	32	70	59	80	70	55	72	70	9	4	0	7	21	50
7	65	40	45	37	40	45	61	62	50	4	13	15	5	23	55
8	31	54	0	4	2	0	21	40	50	64	47	15	55	21	25
9	27	42	0	18	19	0	22	30	20	46	40	45	58	36	20
10	76	74	0	6	0	0	6	6	15	39	43	55	6	11	0
12	20	8	0	4	0	0	15	13	0	39	49	75	55	70	30
13	66	43	0	28	13	0	17	11	0	25	32	70	17	25	5
14	89	70	0	2	0	0	17	4	0	11	21	70	8	9	0
15	49	45	30	60	53	30	40	43	0	9	2	25	26	19	50
16	23	13	0	0	2	0	14	25	0	40	47	50	57	70	45
17	83	53	0	1	0	0	9	9	55	18	21	20	2	8	5
18	83	70	0	12	9	0	29	23	75	10	11	5	10	11	15

日本人と学習者の各項目に対する選択率が完全に一致するとは言えないが、その選択において日本人と東アジアの学習者は似たような傾向が見られる。しかし、各項目に対して同様の選択率を見せつつも、特定の項目においては、日本人と学習者の選択率の差が大きく、選択の順位も異なっていることが分かる。

特にヨーロッパの学習者がそうであるが、〈表5〉で網掛けしている部分がヨーロッパの学習者の結果である。この結果を見ると、「違和感」「自己主張性」「攻撃性」の三つの項目で「0」となっている文が多いのに対して、「敬意」「決まりきった言い方」の選択においては日本人より高い選択率を見せる文が多いことが目立つ。

それでは、次節からは上記のような日本人と学習者、特にヨーロッパの学習者の選択の相違について、「1）調査結果そのものから把握できる事実（「違和感」を基準に両者間の相違について記す）」「2）相違の原因として考えられるもの」という二つの面に分けて述べていきたい。

3.3.1. 「違和感」を中心とした調査結果の分析

ここでは、「違和感」という項目を基準として日本人と学習者（東アジア・ヨーロッパ）の「させていただく」の使用における相違点についての分析を行う。また、本稿では、国語辞典の記述⁸⁾に従い、「違和感」を感じる表現は「その場面で使うのに自然ではない表現」として扱う。「違和感」を感じるとした例文の中で、日本人と学習者の間でその差がもっとも大きかった例文を挙げると例文1と例文2がある。

- (1) (先生と学生が研究について話しています。先生が学生に意見を求めたときに、それに対して学生が) はい、言わせていただきますと、(後略)。[例文1]
- (2) (会社で会議中、相手の意見に反論したいとき) 一言、言わせていただきますと、(後略)。[例文2]

これらの例文は「言わせていただく」という表現が含まれている文となるが、聞き手がそれぞれ「先生」と「話し手が反論したい人」になっている。日本人の選択結果を見ると、「先生」が聞き手となっている例文1に対しては85%の人が「違和感」を感じるのに対し、例文2に対しては「違和感」はそれほど感じないが、「自己主張性」と「攻撃性」の選択率が高いことが確認できる。このようなことから、今の日本人は「言わせていただく」という表現を敬語として用いるよりは、聞き手に反論したいときに、婉曲的な表現の一つとして使用しているということが窺える。

しかし、東アジアとヨーロッパの学習者は、これらの例文に対し「違和感」の選択率が低く、「敬意」の選択率が高いという結果から「言わせていただく」という表現は敬語であるという意識が強いことが分かる。また、例文1の聞き手が「先生」ということを考慮し、先生に対する「言わせていただく」は妥当であると判断したのではないかと考えられる。

- (3) (申し込んだ人と振り込んだ人の名前が違っていても、実は同一人物だというお客様のメールに対し返信のメールで) では、そのようにご理解させていただきます。
[例文13]
- (4) (大勢の人の前で自己紹介をするとき) 私は、2012年に〇〇高校を卒業させていただきます。
[例文14]

8) 『新明解国語辞典』では、「違和感」を「生理的(心理的)にじっくり来ないという感覚や、周囲の雰囲気や人間関係とどことなくそぐわないという判断。」と記述している。

また、例文13と14に対して日本人は「違和感」を感じるとしたが、ヨーロッパの学習者はこれらの例文に「敬意」を感じるとした。これは、例文13の聞き手は「お客様」であり、例文14は特定できる人はいないが「大勢の人」という公的な場面という意識から、このような場面で使われた「させていただく」は自然な表現として捉えているという解釈ができる。また、東アジアの学習者は日本人と同様に、例文14は「違和感」を感じるとしたが、例文13は「違和感」の選択率が低い。このようなことから、東アジアの学習者は特定できない人に対する「させていただく」は「違和感」を感じるという日本人と似たような傾向が見られる。しかし、例文13のように「お客様」という聞き手は敬語を使うべき相手となるため、ここでの「させていただく」は自然な表現として判断していることが窺える。

一方、ヨーロッパの学習者は例文13・14に対して「違和感」を感じるとした人は1人もいない。つまり、「0」である。なぜ、ヨーロッパの学習者は例文13・14に「違和感」を感じないとしたのかを探るために他の項目の選択を見てみると、日本人と東アジアの学習者より、「敬意」の選択が70%であり、これらの表現を「敬意」を示す表現として認識していることが分かる。

(5) (会社の社長に自分の決意を言いながら) 精一杯頑張らせていただきます。

[例文8]

例文8は、東アジアの学習者の5割以上が「違和感」を感じるとしたものである。しかし、日本人は「違和感」の選択率が31%で比較的に低く、ヨーロッパの学習者は「違和感」の選択率が0%である。また、他の項目の選択を見てみると、日本人は例文8に対して「敬意」と「決まりきった言い方」であるという意識が高いため、この例文に「違和感」を感じるとした人が少なかったと推定される。

一方、東アジアとヨーロッパの学習者は例文8に「自己主張性」を感じるとした比率が高いが、東アジアの学習者はこの例文を自然ではない表現としているのに対し、ヨーロッパの学習者はこの表現を自然な表現として判断している。まず、東アジアの学習者の結果は、例文1の結果と結び付けて説明することができる。例文1は先生が学生に「言ってもいい」という許可を与えたため、これを基に学習者は「言わせていただく」を用いるのは丁寧な表現になるという判断をしている可能性が高い。しかし、例文8は聞き手が「社長」であり、目上の人への許可があったとは見なせない場面である。したがって、東アジアの学習者は、この例文は上位者の許可なしに自分の決意を言いながら「頑張らせていただく」と

いう表現を用いたと判断したため、これに「自己主張性」を感じると同時に「違和感」を感じるとしたと考えられる。

他方、ヨーロッパの学習者は例文8に「自己主張性」を感じるとしたにもかかわらず、なぜ、この例文に「違和感」を感じないとし自然な表現として判断しているのかについては、当然、そのような疑問が湧いてくるはずである。これに関しては次節でまた詳しく述べることとする。

(6) (テレビ番組でリポーターが) すごくいい旅で、リフレッシュできて、すっかり元気に
ならせていただきました。 [例文17]

(7) (近所の人に) 私どもは、正月はハワイで過ごさせていただけます。 [例文18]

例文17・18は、日本人と東アジアの学習者とがともに、「違和感」の選択率が83%として、不自然な表現として判断している文である。その反面、ヨーロッパの学習者は「違和感」の選択率が例文17と18とがともに0%である。また、ここで興味深いのは(5)の例文8のように、「自己主張性」の選択率が高いことである。これについてもまた、次節に譲るとして、以下に示す例文5・6を見てみよう。

(9) (ライバルの会社の人に) 今回は、何があっても必ず業界1位を獲得させて
いただけます。 [例文6]

(9)の例文6は、日本人の43%の人が「違和感」を感じるとしたのに対し、東アジアは32%、ヨーロッパは70%であり、比較的にヨーロッパの学習者がこの文を不自然な表現として捉えていることが分かる。また、学習者の別項目の選択率をみると、ヨーロッパは、「攻撃性」と「自己主張性」とが70%であり、東アジアの学習者は、それぞれ、80%・72%の高い選択率を見せている。

このことから、東アジアの学習者は例文6から「自己主張性」や「攻撃性」は感じるが、ライバルの会社の人に対してこのような表現と使用してもいいという認識を持っているのに対し、ヨーロッパの学習者は「自己主張性」や「攻撃性」が感じられるため、ライバルの会社の人に対してこのような表現を使用してはいけないという相反した認識をもっていることが分かる。

3.3.2. 相違の原因として考えられるもの

前節では、「違和感」という項目を基準として、学習者の選択、主にヨーロッパの学習者の選択について見てきた。上にも述べたとおり、ヨーロッパの学習者は「例文 2・6・7・8・17・18」に対して「自己主張性」もしくは「攻撃性」を感じるとした比率が高かったが、例文 6・7 以外の例文に対しては「自己主張性」「攻撃性」は感じられるのだが、「違和感」は感じない表現として認識していることが確認できた。これは、恐らく、ヨーロッパの学習者は例文 6・7 は、文の中に「ライバル・ゲット・獲得」という語が使われているため、これらの文に「違和感」を感じるとしたのではないかと思われる。

しかし、「2・8・17・18」は「自己主張性」を感じながらも「違和感」を感じないとしたが、これらの文の話し手は聞き手とは関係のない個人のことまたは、個人の考えを聞き手に丁寧に述べようとしている場面であるという共通点がある。このことから、ヨーロッパの学習者の「させていただく」に関する認識というのは、今現在日本社会で進行している謙譲語の現象、つまり、「させていただく」の「丁寧語化」という現象と同様の様相を呈していることが窺える。しかし、ヨーロッパの学習者から見られる傾向は、何かを丁寧に言おうとしていることは日本人と共通しているが、そのようになった経緯は日本人と異なるものとして考えられる。その原因となるものを次に述べる三つのことから説明できると思う。

まず、一つ目は教科書の記述問題にあると思われるが、ピッツィコーニ(1997)の教科書の調査によると、「させていただく」について以下のように記述されているとある。

(10) 教科書名：An Introduction to Modern Japanese

(by Osamu and Nobuko Mizutani, The Japan Times, 1977)

「じゃ、待たせていただきます。」 — 場面：ジョンソン、友達の母

[記述] lit : I am given the Kindness of permitting me to something

[カテゴリー] 統語的構造 (許可)

ピッツィコーニ(1997:118)は、上記の(10)などの例を挙げながら、教科書で待遇表現を考慮するならば、場面との強い関わりのため、抽象化された言語の記述は許されないとし、「きまり言葉」ですむ、という危険な印象を与えないように言語構造との関係にも焦点を当てなければならないとしている。このことから、ヨーロッパの教育現場では「させていただく」という表現を「許可を求めるときに使用する丁寧な表現」または、「決まり言葉」のような、断片的な知識を教えているということが窺える。したがって、調査対象者である学習者のその

他のコメントからも、「「させていただく」は丁寧に言いたいときに使う表現だと教わった」「付けるだけで丁寧になるから他の敬語より使いやすいと思う」「ゼミで発表するときやバイトでよく使うからこれをよく使う」などの声があったことと思われる。以上のことから、ヨーロッパの学習者の結果から「決まりきった言い方」の選択率が全体的に高かったと思われる。

また、二つ目は、ヨーロッパの言語には敬体がないことと関連があると思われる⁹⁾。人は外国語を学ぶとき、その言語を理解するために母語（あるいは既習の言語）を媒体として使いがちである（杉山2003:254）。そのため、東アジアの学習者の場合、中国人は「させていただく」に相当する表現である「请让我（们）～、请允许我（们）～」で理解することが可能であり、韓国人は「させていただく」に相当する表現は持たないが敬語を持つ言語であるため、ある程度母語に頼って理解することが可能であると思われる。

しかし、今回調査したヨーロッパの学習者の母語である英語・ドイツ語・フランス語では、物事を丁寧に話すという概念は世界言語共通であるため、それについては理解できると思うが、日本語のいわば、「尊敬語・謙譲語・丁寧語」といった動詞を変えて言葉の敬度の調節ができる形式的な言語形態が存在しない。そのため、ヨーロッパの学習者は「させていただく」を理解し、それを使いこなすことはかなり難しいことであると考えられる。

最後に、三つ目は、ヨーロッパの学習者は「させていただく」を「経済性の高い表現」¹⁰⁾として認識しているようである。前述のとおり、ヨーロッパの学習者は母語にない敬語を使用するのにかなり苦勞することと推測される。筆者も同じ外国人学習者という立場から自分が日本語を話すプロセスについて考えてみると、まず、話す内容を母語で考えて、それを適切な日本語に置き換え、それを発言、または文として表す。このように、ヨーロッパの学習者の場合、自分が母語で考えたことを聞手に敬意を含めて丁寧に話したいと思った場合、「お・ご～する」「お・ご～いたす」「させていただく」など、謙譲語の色々な形の中で「させていただく」は単に動詞を使役形に変えるだけで使える簡単な表現である認識を持っていると推測される。

したがって、3.1と3.2.で見えてきたとおり、ヨーロッパの学習者は日本という社会で生活をしながら「させていただく」を、「相手に敬意を持っているとき」以外にも「適切な敬語が見つからないとき」や「相手に気兼ねするとき」にもよく用いるとしたと考えられ、その結果、この表現をよく使うと答えた人が95%もいたのではないかと思われる。

9) ビッツコーニ(1997:13)・杉山(2003:254-255).

10) 伊藤(2006:146)は、言語の経済性について、長い表現より短い表現のほうが効率的であるとしている。

4. おわりに

本稿では、ヨーロッパの日本語学習者を中心に「拡大用法」としての「させていただく」に関するアンケート調査を行った結果、以下のことが分かった。

- ① 「させていただく」を実生活でよく使用するかという質問に対し、よく使用すると答えた比率は「ヨーロッパの学習者」(95%)>「東アジアの学習者」(70%)>「日本人」(32%)の順に高かった。
- ② 日本人は「言わせていただく」を自己の意見を述べたいときに使用する表現という認識をしているが、学習者は東アジアとヨーロッパとがともに、「言わせていただく」がもつ特殊性に注目するよりは、聞手がだれかによって、この表現を判断する基準が異なることが確認できた。
- ③ ヨーロッパの学習者は今回の調査で用いられた「拡大用法」としての「させていただく」文に「違和感」を感じるとした人の比率が日本人と東アジアの学習者より低く、全体的に「敬意」「決まりきった言い方」として認識している傾向が強かった。
- ④ 上記の③のような結果は、教科書の記述問題、母語における敬体の不在、また、「させていただく」は使いやすいという認識から生まれたものとして思われる。

以上のとおり、本稿では「させていただく」に対するヨーロッパの学習者と東アジアの学習者の認識に相違があることを確認することができた。しかし、今回は調査データと先行研究を中心とした分析に留まっているため、今後、ヨーロッパの教育環境や文化的な要素なども加え、論考をより深める必要があると考える。これは今後の課題としたい。

【参考文献】

- 柏野和佳子(2007)「「外来語」言い換え提案対象語の頻度推移類型一読売新聞・毎日新聞14年分を調査して一」『国立国語研究所報告』126、国立国語研究所、pp.387-401.
- 井口裕子(1995)「謙讓表現「……(さ)せていただく」について一結婚披露宴における使用例を中心に一」『國学院雑誌』96巻11号、國学院大学、pp.54-67.
- 伊藤博美(2011)「「(さ)せていただく」表現における自然度と判断要因」『日本語学論集』第7号、埼玉大学留学センター、pp.139-15.
- 井上史雄(1999)『敬語はこわくない』講談社現代新書、pp.62-81.

- 李讓珍(2016) 「「させていただく」の拡大用法の使用実態について—日本語母語話者と外国人日本語学習者の比較を通して—」 『日本文化研究』 59、東アジア日本学会、pp.241-264.
- (2017) 「「いたす」から「させていただく」への交替—『国会会議録検索システム』を資料として—」 『日本言語文化』 第40号、韓国日本言語文化学会、pp.91-110. (DOI: <http://dx.doi.org/10.17314/jjlc.2017..40.005>)
- 李炳万(1998) 「現代日本語の敬語「(さ)せていただく」考」 『野州国文学』 61号、國学院大学 栃木短期大学、pp.25-52.
- 菊地康人(1994) 『敬語』 講談社学術文庫、pp.29-440.
- (1997) 「変わりゆく「させていただく」」 『言語』 26巻6号、大修館書店、pp.40-46.
- 小池真理(2000) 「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か—「依頼」の場面における母語話者の発話と比較して—」 『北海道大学留学センター紀要』 第4号、北海道大学留学生センター、pp.58-80.
- 塩田雄大(2016) 「「させていただけます」について書かせていただきます」—2015年「日本語のゆれに 関する調査」から②— 『放送研究と調査』 9月号、pp.34-41.
- 杉山アイシェヌール 「第12章外国人から見た敬語」 『朝倉日本語講座 8 敬語』 朝倉書店、pp.252-275.
- バルバラ・ピッツィコーニ(1997) 『待遇表現から見た日本語教科書—初級教科書五種の分析と批判—』 くろしお出版、pp.9-188.
- 野田尚史(2012) 「日本語教育に必要なコミュニケーション研究」 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 くろしお出版、pp.1-20.
- 米沢昌子(2001) 「待遇表現としての使役形を伴う受給補助動詞—「～(さ)せていただく」の用法の考察を中心に—」 『同志社大学留学生別科紀要』 創刊号、同志社大学、pp.105-117.
- 蒲谷宏(1999) 「させていただく」 『言語』 28巻5号、大修館書店、pp.74-75.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二(2012) 『新明解国語辞典 小型版』 三省堂、p.105.

논문 투고 일자 : 2020. 09. 29.
논문 심사 일자 : 2020. 10. 26.
게재 확정 일자 : 2020. 10. 28.

 < 要旨 >

 「させていただく」における日本人と学習者の認識の相違について
 —ヨーロッパ圏の学習者を中心として—

李讓珍

本稿では、ヨーロッパの日本語学習者を中心に「拡大用法」としての「させていただく」に関するアンケート調査を行った。その結果、次のことが分かった。①「させていただく」を実生活でよく使用するかという質問に対し、よく使用すると答えた比率は「ヨーロッパの学習者」(95%)>「東アジアの学習者」(70%)>「日本人」(32%)の順に高かった。②日本人は「言わせていただく」を自己の意見を述べたいときに使用する婉曲な表現という認識を持っているのに対し、学習者は東アジア・ヨーロッパともに、「言わせていただく」が持つ特殊性に注目するよりは、聞き手がどれかによって、この表現を判断する基準が異なることが確認できた。③ヨーロッパの学習者は今回の調査で用いられた「拡大用法」としての「させていただく」文に「違和感」を感じるとした比率が日本人と東アジアの学習者より低く、全体的に「敬意」「決まりきった言い方」として認識している傾向が強かった。④上記の③のような結果は、教科書の記述問題、母語における敬体の不在、また、「させていただく」は使いやすいという認識から生まれたものと思われる。

 The difference in perception between Japanese and non-Japanese learners regarding
 “Saseteitadaku”—focusing on learners in Europe—

Lee, Hyeon-Jin

In this study, we conducted a questionnaire survey on allowing “extended usage” focusing on European Japanese language learners. We found the following results. (i) When asked if they used “Saseteitadaku” in real life often, the percentage of respondents who responded positively was higher: “European learners” (95%), “East Asian learners” (70%) and “Japanese learners” (32%). (ii) Japanese learners understand that “Iwaseteitadaku” is an expression used when expressing their opinions. However, it was confirmed that the criteria for judging this expression differ depending on who the listener is rather than paying attention to the special characteristics of “Iwaseteitadaku” in East Asia and Europe. (iii) European learners felt uncomfortable with the sentence used in this survey as the “extended usage” compared to Japanese and East Asian learners, and they tended to recognize it as “respect” or a “routine way of speaking.” (iv) Results such as (iii) above are thought to have arisen from problems with the description in textbooks, lack of respect for the mother tongue, and the recognition that “Saseteitadaku” is easy to use.